

槐

かい

岡井省二創刊

平成19年12月号

平成十九年十二月一日発行 第十七卷第十二号 通巻第一九八号 (毎月二回一日発行)
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



過
去

高橋将夫

藁塚の高さを競ふこともなし
限界を越えんと鯨の飛びにけり
牛蒡掘なにも掘らずに帰りたる
山裾に草の絮とぶ氷室跡

紅茸のほとん白き柄なりけり
底紅の紅流れだしさうな雨
白象も絵から抜け出す月夜かな
残り火のまた燃え上がる秋の夜
形なきものに値のあり秋の声
繰り返す集合離散群れ鱗
流れ去る秋雲すでに過去のもの

冬 銀 河

前田美恵子

白装束の杖をふれなば初桜
孕鹿眼に力ありにけり
白球を追ひ来る犬と水着の子
みせばやの花二度の雨に逢ふ
渡りゆく風の戯れ小判草
紙袋舞ひ上がりたる秋の晴
神籬に淡き光よ小鳥来る
磯風に誘はれて新松子かな
人恋ふや鯉の離れぬ九月尽
不覚にも迷ひ込んだる芒原

特別作品

粉ふいて銀杏の実の皺々に
真夜中の虚空膨らむ残暑かな
掬ひたる指よりこぼれ秋の水
地球儀の地軸の傾ぎ省二の忌
累々と光の円舞草の露
坂道もどこかで終るちやんちやんこ
冬銀河時空に歪みありにける
雁や頑固一徹通しける
呼ぶ声は狐の化身赤子泣く
東雲の光曳きゆく漁始

槐安集

水野恒彦

水澄むや遺したきもの何もなし
ひつそりと蜜の溜りし花野かな
遠き木に残る眩しさ秋扇
ひぐらしのこゑ銀箔を曇らす
月の州の渺茫たるに人現る

延広禎一

醉
芙蓉に慈眼を返す伎芸天
夕明りガラスの河馬と白桃と
夜の桃や遊戯の器に塩振つて
桃色の蝦蟇の膏あぶらや破れ芭蕉



加藤みき

白桃の媚にはあらずほてりかな
田の色のドミノ倒しとなりぬたり
返り花雲ひとつなき天守かな
青柿の中に真赤の柿一つ
じりじりとしほからとんぼ日イ匂ふ

石脇みはる

整ひし主なき庭小鳥来る
無花果の三つの裂け目曼陀羅に
鶏頭の頭の大いなるしなりかな
後の月駱駝の背の一つこぶ
鉢植の土干しぬたり時鳥

中島陽華

月光の差し来りけるワイン飲む
歌声はほとけに貫ひ秋の空
秋の汐うぶな男のオムライス
大江戸の鰻まぶしとなりぬたる
鰻頭笠送り出したり月鈴子

竹内悦子

冬瓜や足洗ひ水置かれあり
桐の実の降るほど黄金色なりし
白象の背^ヲを越えゆく秋茜
人がゐて没日の中のかなかなかな
赤とんぼ群れたる川の流れかな

栗栖恵通子

風呼べば師のこゑありし萩の風
省二忌の絹のふどしに就いてゆく
割り箸の先のささくれ残暑かな
一^ト雨の来さうな茄子の一夜漬
天照大神稲穂の波のうち笑ふ

大島翠木

豕偏つらなる塚や曼珠沙華
すぐ上に蝕済む月と凌霄花
始まりは玄武に集ふ鶉の篝
丹田呼吸まつよいぐさの真盛り
一山の靈気に揺るる蛇の衣

雨村敏子

身に覚えなき噂なり枯蠟螂
並びたるものみな清ら艸の市
炎昼の心ぼつかり浮いて来し
命毛や仙紙一反天涼し
月食を見たるか夜の蓑虫は

小形さとる

無花果の臍十字架をみてゐたり
黒塀やあたら浮世を萋の花
怪我ばかりして青鬼灯の夜は
蹄あしうらに施餓鬼の夕べ来てをりぬ
おうおうと転まろびて月の橋がかり

本多俊子

居待なる上人の夜を思ひをり
たましひとなり枯蔓の力かな
葭原に舟出の音をのこしけり
一葉落つ穴ぼこぼことあいてをり
萩の月土の中まで照らすなり

天野きく江

日を畏おそる秋海棠を愛をしむかな
行き合ひの空に恋して秋茜
ひかり合ふ人間たりし吾亦紅
秋の蝶時空世界に入り込む
稲熟れて精霊祀る太鼓かな

槐市集

谷岡尚美

黄^こ金^が さす唐招提寺 秋高し
平安大修理終ふ

大文字残して消ゆるわが思ひ

葛垂るる若狭街道途中越

曲水のみなもの杜や藤袴

じつと見る少年の眉爽やかに

谷村幸子

勢のよき子ども御輿に初穂かな

門跡の大樟くぐる秋の雲

秋扇うぐひす張りの廊ふみて

斧入れぬ鎮守の杜の櫨紅葉

秋槐ひろがる下の憩ひかな

寺田すず江

ゆらゆらと燃え立ちてをり曼珠沙華

なんとなく人恋しくて杜鵑草

あぎとより秋深みけりピカソ展

穴惑ひ極限を見し貌をして

胡弓の音沁みわたりけり風の盆

富松寛子

錫杖の鳴りをる足音五智清水

石仏の道の先々小鳥来る

土瓶蒸し曾^ひ孫^こ七人の母なりし

百歳のよしこの節や阿波踊

草の実のかたちいのちの容ちかな



槐集

高橋将夫選

白い闇ぬけて身にそふ秋湿り
朝昼をつつんでゆきし秋夕べ
墓きめて満月高くありにける
ひたひたと生きてきました栗ごはん
澄む秋の茶筌通しの湯の滾り
核心に触れずにみたり黒葡萄
みせばやの毬に浦風生まれけり
かぐや姫も嫦娥もやさし赤い月
棉の花酔へば桃色吹いて来よ
阿波踊ひと夜眉山に抱かれり
穴惑ひ性善説を思ひをり
しろがねとくろがねの風や芒原
仰臥して己を顧みる花野
鯉泳ぐ六趣の水の冷ゆるなり
眼の前のムンクの叫び冷やかに

枚方 中野 京子

富松 寛子

岡崎 岩月優美子

法然やほのと閉ぢける酔芙蓉
芋名月この日捨てたるわだかまり
世を捨つる者にもなれず月を浴ぶ
遊び紙に翁草の繪秋澄めり
秋虹や時計まはりに子ら走る
精出して精つく山の芋を掘る
胡麻干しのための莖を借りにゆき
咬み合ふも愛なる故か枯蠅螂
わら燃す烟り村焼く秋収め
揚羽来て花には重き翅合はず
夏蕪のうなづいてゐる宇宙論
生霊も死霊もそろふ青山河
三世みな五欲ひきつれ麦こがし
羅を着て奪衣婆と逢ひにける
蚊吸鳥穴禅定の仏たち

京都 竹中 一花
福井 久津見風牛
宗像 南 一雄

銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」 観照

墓きめて満月高くありにける 中野 京子
墓を決めた心境を「満月高くあり」と言うあたりがいかにも作者らしい。思わず藤原道長の「この世をばわが世とぞ思ふ望月の」を思い出してしまった。句集も出したし、墓も決まったから、心おきなく俳句に邁進できるといったところか。

核心に触れずにみたり黒葡萄 富松 寛子
世の中には核心に触れない場合や、触れない方が良い場合もある。黒葡萄はその心境を代弁しているわけである。マスカットに置き換えてみるとその違いは一目瞭然。それはそうと、この葡萄は種無しに違いない。

仰臥して己を顧みる花野 岩月優美子
大の字に寝転んで秋雲を見ていると、確かにいろいろなことが脳裡に浮かんでくる。己を顧みるとは言っても花野でのこと。それほど深刻に考える必要はなさそう。

芋名月この日捨てたるわだかまり 竹中 一花
名月を見ていると心が洗われる。わだかまりを捨てての心境がよくわかる。芋名月も名月と同じ八月十五夜の月で、芋や団子を供えるところからきている。「名月」でなく「芋名月」として中七以下に血が通った。

精出して精つく山の芋を掘る 久津見風牛
「精のつく山芋を掘るのに精を出す」は理屈のようだが、実景でもある。山芋を掘るのにいちいちそんなことは考えないだろうが、言っていることは間違っていないから愉快。それだけ精があるなら、山芋はいらないのではと思ってみたりもする。リフレインもおもしろい。俳諧。

生霊も死霊もそろふ青山河 南 一雄
一木一草にも霊が宿るといのが、青葉のころは山河も人も生気にあふれている。一方、緑陰の奥深くでは死霊がさ迷う感がある。明暗、陰陽、虚実、表裏一体。

染几帳は白孔雀なり後の月 近藤きくえ
几帳は冬は練絹に朽木形、夏は生絹に花鳥などがある。掲句では白孔雀が鮮やかに浮かび上がる。名月でなく後の月であるところが奥ゆかしい。

時の嵩祝集めでたく踏みて翁草 谷村 幸子
〈時の嵩落葉の嵩をふんでゆく 京子〉(句集『翁草』の掉尾の一句)の本歌取。これまでの人生、いろいろな苦難もあつただろうが、「めでたく」の一語で全てがめでたく陽転したような気がする。

繊細なこころ虫鬼灯にかな 近藤 喜子
虫鬼灯とは繊細だけが綱目状に残り、中の赤い実が見える鬼灯。言われてみれば、なるほど虫鬼灯が繊細な心の形に見えてくる。そう言う作者の心もまた繊細。

(以下略)